

明治二十三年 洋行日誌 卷一

洋行日誌 第一報 芝より上海に至る

(●第一日目)

三月二十三日 日曜日 快晴

午前五時三十分、芝新堀町の自宅を出て、親族知己に送られて新橋駅に着く。同所には既に松野教授以下、内海五郎、細井均、安仲田岩、松岡氏伴、山崎の二嬢、その他大勢の朋友知己が見送りに来ていた。六時十分発の汽車で諸氏に別れを告げ横浜へ向かう。

同行は養父、生母、妻、安田庄之助、折原・白石の両兄、小野田安太郎、金子茂樹、根岸千悞、塩田武八郎、小西成章、多賀要造などの諸氏である。横浜では西村新七方で小休止し、その後小蒸気船で仏船ゼナム号に乗り込む。池田清、雨宮貞幹の二氏が新たに見送りに加わった。

同船の人々には池田正介〔陸軍少佐〕、栗野慎一郎〔外信局長〕、坪野平太郎〔通信省参事官〕、岩崎某〔同上属官〕、高田商会の草刈義三郎〔高等商業学校卒業生〕、勝島仙之助〔農林学校教授〕などの諸氏があり、これに正金銀行のリオン出張所員の武澤氏の細君が加わり、私を含め都合八人の日本人となった。その外数名の西欧人がいる。

船体は、鉄で覆われ、長さは七十五間、幅は十間を下らない。速力は十四ノット。乗客を除く乗組員総数は七十五人、うち水夫二十三人、医師一人で、主な役員はすべて仏人、労力者には中国人が多くアフリカ人も数名いる。

船は午前十時に出港。天気はやや曇りであるが、風は静かで波はない。みるみる横浜港は波の彼方に消えていった。前から思っていたとおり、船の中は余り良い心地はしない。右手には横浜の観音崎が見える。左手には安房の富山が見え、伏姫の古事を思い起こさせる。彼方に見える州崎をみれば、役の行者の法力をもって、わが別離の情を引き離してくれる。

夕方、伊豆の海に入り、大島の近くを通過する。去年の今ごろ歩き回った天城の山脈は、遠い昔のことに感じられる。遠州灘に入った頃より夜となる。熟睡してその後のことは覚えていない。乗船した多くの者が夕方から船酔いとなり、食事をする事ができなかった。嘔吐をするほどではないにしろ、頭痛が始まり、苦しみ時に親を思うということが良く分かった。家の者から持たされた蜜柑により、どうにか渴きを凌いだ。

(●第二日目)

三月二十四日 月曜日 雨天

午前六時に目が覚める。しかし、昨來の船酔いが未だに良くならない。起きることができない。朝と昼の食事もとれず、ただ蜜柑だけが喉を通った。

午後一時、船は三百四十三海里(一海里は十四町余りに当たる)を走り、無事神戸に着いた。時に大雨が降っていたが、一行皆が上陸するので、私も気分が悪いのを押して雨の中上陸した。車を雇って西村方〔船宿〕へ向い、風呂に入り、日本食を食べようやく気力が出来た。しかし頭痛は未だ続いている。

三時間ほど休憩した後、床屋に行き髪を五分刈りにする。これは池田氏の注意に従い、インド洋を渡るのに備えたものである。このとき厚意を感じたのは、西村の番頭が私に自分の立派な洋傘を貸してくれたことである。床屋からの帰り、船中の油臭を防ぐために香袋を買い求め、西村に寄って傘を返し、勘定を払う。この夜同行の者は皆陸に上がって、ある者は大阪へ、ある者は福原などへ行つて、日本の名残を惜しんだという。私だけ船中に一人が残ったが、停泊中なので静かに眠ることができた。

(●第三日目)

三月二十五日 火曜日 快晴

午前六時起床。昨來の天気もよくなり、初めて晴れ、朝日が東の海に昇った。波も静かで鵞も眠っている。昨夜の熟睡によって、気分も初めて爽

快となり生き返った思いがした。

こうなると何故自分だけ船の中にいることができるだろうか。近郊を訪ねて見識を広めようと、車を雇って出掛けることにした。なるべく口数の少ない車夫を考えた。しかし、イッチ（一番）、イコウ（沢山）等の言葉は非常に聞き取りにくい。税関を出て東へ走る。芝堤で囲いをした芝生地があった。これは外人の打球場ということで、黒い煙の昇る煙突は神戸紡績場ということである。

線路を横切り新街に入る。ここは布引の滝道と呼ばれ、昔は滝川が流れていたところで、十七年前に前川を東に造って、元の川跡を新街にしたものという。街の両側には山桜があり、ちょうど満開となっていた。しかし東京の桜やわが芝山の桜と比べるほどでもなく、未だ一里にも達していない。思わず微笑んでしまった。

滝口に至る。これより徒歩で車夫に道案内をしてもらおう。山道を登ること数町にして女滝に至る。この間は溪流が続き、精米用の水車が多く見られた。女滝の長さは十八間、幅二間。滝の前に布引観音がある。その軒下で小休止する。雨が降った後なので、濁流となっていて、水しぶきが服までかかってくる。

女滝より登ること更に数町、男滝に至る。滝の長さは二十八間。だが残念なことに中段がある。もし、この段がなければ三国一であるという。しかし、私はこの三国一という言葉の意味がよく分からない。ただ滝は日光の華厳の滝に勝るものはないと聞いている。ああ、それにしても何と樹木が鬱蒼としていることか。雨の降った後なのに、滝の流れは清く、晴れでも雨でも水量は変わらないという。見物客を多く引き寄せることだろう。山はすべて花崗岩で出来ていて、松が自生している。山の低いわりには滝は大きい。一首思い浮かぶ。

遠山にこうべをあげし其ときのみかけによらぬ滝の長さよ

連山中、摩耶山を最高として、滝口より有馬の温泉に六里という。山を降り、県令の官舎前から山を切り開いた道に入り、行くこと十数町にして遠山の下に着く。さらによじ登ること数町。そこには茶店があり、茶菓を

喫しながら車夫の講談を聞く。

見下ろせば神戸、兵庫の町並みが一面に見渡せる。一説に神戸と兵庫を合わせて二万戸というが、今は五万戸を下らないばかりか、一戸に多くの人が暮らしているという。製茶場のような所は、時期には一千五百人余りの工女を雇い入れるという。このことから人口の多いことが分かる。

思い起こせば、建武の昔、南北の朝尊氏と楠の合戦は和田峠であった。蜷川の旧跡を訪ねて忠臣の墓をお参りすることにする。早速、山を下って西へ向かう。路傍樹（ユーカーリ）が大きく繁茂している。東京ではユーカーリは寒さに弱い霜にやられてしまう。このことから、この地が気候が温暖であることを知ることができる。

行くこと数町にして楠公の社に至る。境内は大きいと意外と社は小さい。要するに清浄を旨としているのである。社が小さいということは、涙が小さいということである。日本の歴史を知るものは、その涙の大小を知るべきである。社の西門前には玉転がしの店が軒を並べ、まるで東京の浅草のようである。ここから蜷川に至る川底は非常に高く、汽車はこの川底を横切っている。先年、堤防が破壊して福原、神戸の全市を浸水させたという。

帰りの道すがら車夫の案内で福原を見物する。ここは東京の吉原のような所で、大きい店が四十軒、小さい店が三十軒ほどで、このほか稻荷新地には四十軒程の店がある。中でも松浦多門戸という店は、一戸で二、三十人の芸子を抱えているという。その盛況なことは、廢娼論は遠山の上を通り越していくようである。それより元町に出て、江戸屋にて昼食を食べる。これで日本食も当分食い納めかと思うと、妙な気持ちになって午前十時半に帰船した。朝六時半に出て、僅か四時間で十分に観察することはできなかった。しかし十二時出航の予定のため、置き去りになることを恐れていることである。

船は午後一時に出航したが、浅瀬に乗り上げ五時間を徒費し、六時頃になつてようやく神戸港を去ることができた。ここから先は風景の良い所が多いが、夜になったので何も見えず記す訳にもいかない。

(●第四日目)

三月二十六日 水曜日 快晴

午前六時起床。心気爽快。コーヒーとミルクを飲み、甲板に上る。一天晴朗、微風がおもむろに水波を起す。七時には小豆島を過ぎ周防灘に入る。十一時半、平家沈没の壇ノ浦を過ぎ、十二時には神戸より二百二十三里を航海して長州下関に至る。海の幅が狭く、手を延ばせば両岸に届きそう、まさに山水明媚風光絶景である。

下関の市街は長く、右岸に沿って大瀬戸、小瀬戸が連なり、左手には与次兵衛が瀬戸、小倉若松がある。蔽龍が島には避病院があり、白亜の建物が翠松の間に見える。願いがかなうものなら、病にかかつてこの絶景なる龍宮に入りたくなるような気さえ起こさせる。しかし、無情な船は長くこれらの風景を眺めさせ、母国との別れを一層強くさせる。早くも船は玄海灘に入る。思い起こす、回望無由望帝京千重山水万重情の句を。

夕方、対州五島の景色を最後に日本国を離れる。帆柱の上に一片の月を見る。波は四方に堺なく揺れ、天に接している。この辺の海の色は暗黒に見える。おそろく黒潮の流れに入ったからであろう。

夜に入つて遊戯場に一同が集まった。花札遊びをする者の手つきは本職然としており、そのお手並みには驚いた。側にいた竹澤氏の細君がいうには、今の殿様は昔の殿様とは違うのだ、というようなことである。私は長く書生界に遊んだが、下等な遊戯、雑談などは遠く三舎を避けた。高等官たる者は下情に通じないことが処世の心得と思つていたが、実に難しいものである。しかし、私は武士の処世術はことごとく習つていて、その取捨は自ら考へるべきである。明治青年の胸中に、なかんずく新日本建築の青年の胸中に。午後十時就寝。

(●第五日目)

三月二十七日 木曜日 細雨霏々 寒暖計四十五度(撰氏七・二度)

午前六時起床。東方を押し朝食をとる。雨天のため終日床の上で読書する。船中の雨天は実に気分が悪い。夕刻になつて海の色が茶黄色になつて

きた。揚子江の濁流によるものと思われる。この濁流が含む土の量はどれほど多いものであろう。支那の生産力を流失させること大である。もしも私に千万年の命があれば、下流の海面を借り置き、肥沃な新島の王となるであらう。

午前十一時、忽然と雷が起き目を覚ます。すると辺りには霧が立ち込め、一寸先も見えない。そのため碇泊、霧の晴れるのを待つことになった。碇を下ろす音の実に大きいことよ。船中の電灯が一瞬輝いたことにはびつくりした。翌朝十時、ようやく霧が晴れ碇を上げる。

寒暖計は毎朝七時に記す。華氏を用いる。

(●第六日目)

三月二十八日 金曜日 曇天 四十五度(撰氏七・二度)

今朝上海に到着する予定であつたが、昨来の霧のため船の進行に支障がでたため、夕方になつてようやく上海より七里手前の呉淞に到着した。同所は揚子江の河口にあたり、砲台を備えている。乗換船のメルボルン号はすでにこの場所まで来ており、ゼナム号もここで止まることになった。私たちがメルボルン号に移した後、ゼナム号も直ちに上海に向かい、一週間程上海に碇泊するという。明朝五時に乗換えということなので、私たちがその支度をしていると、同行の者は既に上海に向けて小蒸気船で出發してしまつた。私と岩崎、草刈、武澤の四人は船中に置き去りとなつてしまつた。ただただ泣くばかりである。船中にて一夜を明かす。この日は雨天で、かつ波が少しあつたので床の上で読書をして過ごした。あまり気分の良い日ではなかつた。

(●第七日目)

三月二十九日 土曜日 曇天

午前五時三十分起床。直ちにメルボルン号に乗り換える。同八時、小蒸気船で上海見物に出発。上海はこの揚子江を遡ること七里のところであり、途中南京船を多く見掛ける。船首には必ず二個の眼を書き、あたかも鯉が

遊泳しているようである。船尾には赤青の彩色をもつて関羽張飛等の像を書き、あたかも日本の銭湯の栢榴口のようなのである。船の両側には大きな文字で「江南蘓 第拾陸号 金福商船」など、天下泰平、五穀成就のような文字が書かれ、帆も使いやすく工夫されている。木材を積んだ船が多く、船尾に水夫（南京人）が行列して、訳の分からない歌を歌いながら、長い櫓を操る姿は誠に奇妙なものである。私には絵に書かれた安德帝の船が出現したか、幽霊かと思われる鳥首蛇身の船が多い。

揚子江は幅一里余り、兩岸には土堤がある。春草緑を敷き、柳は春風に吹かれている。上海の近郊には山岳はなく、すこぶる広大な沃土が広がる。樹木も少なく、ネズミモチの種類と思われる柳がみられる程度である。

川のほとりには大きなビール製造所や紡績など各種の製造所が立ち並ぶ。造船所も新旧二カ所ある。しかし洋風の建築物はすべて西洋人のものであり、支那人の建物は日本の稲荷神社か浅草の仁王門のような建築であり、家の前には山門（増上寺のように）がある。屋上には鯢（しゃちほこ）がある。青く、赤く彩色した地獄の仁王門の絵を寺の僧に見せられたことがあるが、それを実際に見たような気分である。

洋行日誌 第二報 上海に至る

上海の港に着くと、岸に沿って棧橋が見えた。巨大な船も横付けすることができ、その便利さは横浜の比ではない。岸に沿って欧州人の街が広がる。大きな館や高い建物が隙間なく並ぶ風景は、日本の銀座も足元にも及ばない。岸に上がると支那人の車夫が群集し、乗車を勧める。

車に乗って、日本の郵便局へ向かう。同局員の案内で日本ホテル鉄馬路東和洋行に行き、日本料理の昼食を食べる。御飯と白魚、それに味噌汁だけであったが、久し振りのなので大変美味しく感じた。食後、市内見物に出掛ける。美しい市街は欧州人の街で、支那人の市街は不潔極まりなく、ほとんど鼻を覆うようである。ただ商売の繁盛している市街は、水運にも恵まれて、際限なく拡張されており、東洋一といえようか（この先はどうか分からないが）。樹木は柳が多く、ネズミモチが多い。

この時期上海は、日々陰鬱として梅雨の気候になっている。加えてインフルエンザが流行しており、日本人では二十人余り、西洋人では無数の者が病気にかかっている。しかし、それほどひどい症状ではなく、寝込むには至らずすぐに回復するという。ここに比べれば日本の梅雨の方が晴れの日が多いという。とにかく夏は暑く、冬は寒く気候の悪い水質不良のところであり、健康に悪いところだと領事館の人が話していた。

人力車には乗客から適当な賃金を与えればよい。始めから決めて乗る必要はない。もし車夫と賃金のことで争いになれば、閻魔王のような巡査がただちに駆け付け、車夫を乱打し是非も無く制圧してしまう。実に驚くべきことである。また、この他に一輪車もある。下等の人の多くはこれに乗る。この車は中央に一個の大八車があり、両端に一人ずつ客を乗せ、一人でこれを引いていく。甚だ巧みである。

支那人の屋号、広義祥土号、陳文漢洋行、異人指授權丸藥などの広告は面白い。時々馬車が走るのはいずれも異人、つまり欧州人である。

ちょうど道普請の最中だった。数人の南京人が車を引いている。各々が芝居でみるような横がらの長柄の傘を一本ずつ持っている。この傘を横にして妙な歌を歌いながら、悠々閑々と市街を練り歩いていく様は実に面白く、哲学者であれば何と表現するだろうか。

この地の車夫等が少しも英語を話せないのには閉口した。何を言っているのか少しも分からない。道を間違えて出港の時間に遅れることを氣遣い、僅かに一部分を見物して、十二時に元の小蒸氣船に戻る。二時に本船に帰る。

上海は少しも山が見ないところで、平野広大のため市街はいくらでも拡張することができる。加えて水運にも恵まれており、地形的にも将来ますます隆盛することが推察できる。ただ、気候の悪い点だけは断言できる。船は午後三時に出港し南西へ向かう。

今、我々一行はどの地点にいるか。東経百十八度、北緯三十一度であり、東京より真西のやや南にあり、千〇八十五里を隔てている。

上海で乗り換えたメルボルン号は、三千八百八十七屯、速力十四里半、

汽力三千四百馬力である。乗組員総数は百四十七人、この内水夫は仏人が三十人、支那人が三十人、アラビア人が四十人である。その他、仏人の女給二人（一人は三十二歳、一人は四十八歳）、医師一人で、千八百八十二年すなわち今日より八年前に製造されたものであるという。

（●第八日目）

三月三十日 日曜日 天気快晴 寒暖計五十度（摂氏十度）

六時起床。甲板に上れば天気晴朗、海水の色は青緑である。すでに揚子江の濁流から遠ざかっていることを知る。漫々たる大海原、終日陸を見ることはできない。乗客は上海より大いに増加したが、私の部屋は岩崎氏と二人であるため誠に都合がよい。乗客の中にはドイツ語を話す人も多く、会話の稽古にもなり、大変上手になってきた。

（●第九日目）

三月三十一日 月曜日 天気快晴 寒暖計六十度（摂氏十五・五度）

午前六時に目が覚める。朝日が船窓を照らす。船は西南の方向に向かって走っている。八時半、西方に帆船二艘を見る。十二時、ドイツ汽船を追い越す。午後数多の小船を見掛け、陸に近いことを知る。今日より我々は熱帯線（北緯二十三度半より熱帯）の内に入る。午後より日誌を写し、第一回の報を出す。

（●第十日目）

四月一日 火曜日 天気快晴 寒暖計六十五度（摂氏十八・三度）

午前五時起床。陸に近くなつたことの嬉しさに早起きをした。七時半、船は上海より八百七十里を走り、無事香港に到着し碇を下ろした。香港は支那大陸と数町隔てた一小島であり、市街は山腹に沿い、海上から見ると大変美しい。

午前八時、雨を犯して一行と共に小船にて上陸。車に乗って日本ホテルの大高佐市方へ向かう。ホテルは三階にあり、天井もなくあまり綺麗では

なかつたが、他に日本ホテルがないため、止むを得ずここで休憩し、日本料理の昼食の支度を命じた後、日本領事館へ向かつた。

館は山の中腹にあり、市街の眺めは絶景である。日本領事代理の斎藤幹氏に面会し、お茶を御馳走になりながら二時間ほど雨の止むのを待たせてもらった。同氏が言うには、領事は転任以来未だ未定である。二日前に伏木丸から男一人、女七人の死体を引き取った。これは密売女で、出港前の発露を恐れ、船の蒸気機関の釜の三尺ばかり下の倉庫に隠れていたものたちである。石炭を上から積み込まれ出るに出不れず、すでに船は出発してしまつた。釜は熱され、呼べど叫べど情けなや。十二人の内、八人が蒸して殺され、四人も半死状態であつたという。悪行をなす者の自業自得とはいふものの、これも同胞の話とあれば、聞くに堪え難いものである。

また同氏がいうには、当所は雨が多いところで、九十里奥には広東（かんとん）がある。船は毎日二回出て、八時間で広東に到着することができ。当所は地所が狭いので、時々広東へ遊びに行くといふことである。広東留学生で、日本の広東人がいた（支那風の風俗をしている加賀の人である）。澤野格太郎という。広東の日本領事館内に身を寄せているらしいが、今回はたまたま香港の大祭見物のために、ここに来ていたのである。紹介のうえ私たちの案内をしてもらうことになつた。

こうして、同氏と共に前の日本ホテルへ行つて昼食をとつた。鳥鍋、刺身、大海老、煮魚、蒲焼、汁、茶碗盛などが出て大変美味しかった。ただ食後、家の汚穢なものと、便所の不潔なのをみて嘔吐を催すほどであつた。

食後、まだ雨は止んではいながつたが、澤野氏に案内されて市街を見物した。皆三階建てで石で出来ていた。中でもビクトリアホテル、ホンコンホテル、上海香港銀行などは大変立派で、五六階建てのうえに建物の回り全体を花崗岩だけで造っているものもあつた。道路はすべて花崗岩の細片をコンクリート（石灰と粘土）にして固めてあるため、雨天でも少しもぬからない。しかも道路両端の側溝の設置、屈曲、勾配などは、すべて土木学上の法則に沿っている。ある人は市区改正の後にできたものというが、香港の歴史を知るものは、十数年前に新しい知識を有する人々が、新しくつく

った市街地であることを知るべきである。ただ山腹に沿った市街地の勾配が急なため、車を用いることはできない。ほとんど登ることができないほどの急斜面である。花崗岩の先端で滑落を防ぐというが、危険なものと靴の破れることを防ぐためには、他に構造を変えることができないものか。

この日は香港の一年に一回の大祭日であり、しかも昨日英国の皇太子が来たということもあって、これをお祝いするため空前絶後の大祭が催されていた。市街はすこぶる混雑し、日本の神田祭のように所々に金銀で飾った門が飾られ、または舞台を設け、旗が掲げられている。

舞台では人形芝居が行われていたが、だいたい日本と同じようなものである。音楽はピーピージャン、チエーキューとなり、異様な感じがした。その他屋台での市街巡回も多かった。屋台は六人程度で担う籠で、龍虎の像を載せ、龍の火炎の先の虎の上に少女を乗せていた。この少女は八歳から十四歳位までで、美しい者を選んで、鉛白と紅をもって化粧し、綺麗な金欄の衣装を装い、扇子または弘子（ほっす）を持っている。すまして練り歩く様子は日本の天皇様の山車と同じ様である。

屋台の前には二箇万燈をつけ、後には騎馬の少女、太鼓、金だらいの囃子方、及び茶釜の小屋などがある。若い者が揃いの衣装を着け、「ジャンピー、キューキュー」と市街を練り歩く様は実に面白い。

市街の上方に大きな公園がある。天然の好位置に新知識を利用して造ったもので、園の構造や植物の配置が大変面白い。日本では花を咲かせない植物もよく花を開き、紅、黄、青、白の花が互いに色を競い、香りを戦っている。しかも、緑樹が鬱蒼とし両手で掬えるようである。猿猴杉の大きいものは、しばしば樅の木と間違ひそうになる。芭蕉花、ソテツ、サボテン、シダ、シユロ等は皆驚くほど成長している。日本では花の時期である桃は、すでに実がなり熟している。菊科の植物もまた花を開き、女竹の大きいこと、スキモチの木が気根を生じることなど、一目で熱帯地方の植物の特徴が分かる。四季は常に春のようである。実に北緯二十二度十二分に位置する所は、テールの上で学んだことと違わないことを知った。この綺麗な翠緑豊かなガルテン（庭）に遠慮なく雨は篠を束ねて降る。私の思

う百分の一も研究ができない、何たる無情か。

公園の麓にステーションがある。これはただ山に登降するために用いるもので、愛宕山に鉄道をかけたのと同じである。その贅沢なことには驚くばかりである。贅沢なものを見たくなるのが人情である。上下四十五銭の上等切符を求めて乗車する。山は有名なビクトリアパークと違って、眺望の絶景な所で、千五百尺の高さがある。軌道は山腹に直線に架し、一つの縄でもって二個の列車をつなぎ、一個下れば一個が上がる。しかし傾斜が急なため、一本の縄に車中の人々の生命をつなぐかと思えば、谷底を見る目がぞつとして、板子一枚下は地獄という所である。

先年、この縄が切れて多くの人命を落としたという話を聞いて、身の毛がよだつというのはいやほやほや理学の未熟者。縄が切れても歯止めの方法がある。この贅沢な仕掛けをする人が、どうしてこのことに気が付かないことがあるのか。見下ろせば目の回るような峻山を一千五百尺いっきにつるし上げられ、今やこの汽車を使っただけの価値ある眺望に望もうと車を出たときは、白雲が一時にたなびきわたり、道を行こうにも先が分からない。一寸間違えば、千仞の谷か海か底は分からない。しばらくして一つの小屋を見付け、中に入って雲の晴れるのを待つ。一杯のビールを飲み干し、一皿のピスケットも食べ尽くしても、ついに一方の景色も見ることができなかった。天帝はなんと無情なものか。無粋者には見せないという訳か。さてまた欧州行の私にこの景色を一目見せれば先へ進まなくなってしまうことを懸念してのことなのか、聞きたいものである。

山を下って轅に乗り、船に帰ろうとしたとき空腹を覚える。こうして一行の支那料理の相談がまとまった。香港の支那料理で一二を競うものに杏花楼という店がある。店はクイーンズロードという市街にある。石造三階建でお客の数が多し。私たちの一行は中等料理を命じた。始めは茶、大茶碗に茶葉を入れ、湯を入れたものである。そのため葉を食べるのかと思うとそうではない。これは蓋で避けて露のみを飲むのである。次に支那人であれば煙草を飲む。キセルは水煙筒というものである。下に水を入れるものもある。強く吸うと水まで飲んでしまう。しかしニコチンの害を予防す

るには便利である。煙が一回水中を経過するからである。

次いで食卓に移る。卓は木製で、上に白布をかけ、木の腰掛けが四方にあり、四人掛けることができる。まず卓に出てきたのは、水瓜の種玉子のどぶつけ、落花生胡瓜と貝類の三杯酢、生姜の砂糖漬の煮物。以上は小菜といつて日本の三つ物にあたるもので、常に出すものという。これに雪梨酒を添える。この酒は徳利に入れず、酒瓶に入れる。日本の行燈の油つぎのようなものである。この後出てきた御馳走は、フカヒレの吸い物、汁腿腸鳩（豚や魚のスジのようなもの）、白鳩と勺葱の甘煮などで、それぞれ大きい鉢に盛ってある。それを各自が備えられた小皿に取って食べる。酒が終り、飯を出すときに出てくるのが、つゆ物、漬物、田楽、ピンロージの実の葉巻などである。

読者諸君、諸君はすでに支那料理に満足したならば請う。少しの間、あの美しい公園に散歩して、食物を消化させなさい。その後に後段を読まれることを。そうしなければ折角の馳走を吐き出すことを恐れるからである。給仕は汚い男子で、不潔の衣類をまとい、指を腕中に二寸ほど入れる。特に飯などは腕中に黒い指跡が印してある。印の付いた布巾でもって、客の前で皿を洗わず直ちに拭き、直ちに別の客に出す。箸は一応象牙であるが、開店以来同じものを使っているため、先端は磨滅して黒色を呈し、老人の臼歯に似ている。便所と厨房は同じところにあり、流しの下に放尿するため、悪臭が台所をおおい不潔極まりない。小菜のようなものは幾万人の客に出したのか。古いものの上に又足して出すことを目の前で料理するため、とうとう見ない訳にはいかなかった。ただ少し良いところは、食後金たらいに湯を持って来て、顔を洗うことができることである。

午後七時、本船に帰り寝につく。

(●第十一日目)

四月二日 水曜日 曇天 寒暖計六十六度（摂氏十八・八度）

正午、十二時に香港を出発。南に向かつて走る。今日は少し波が高いたぬ床の上で休んだ。

(●第十二日目)

四月三日 木曜日 小雨 寒暖計八十度（摂氏二十六・六度）

今日より急に暑中の気候となったため、皆夏服に変わった。日中は蒸し暑かった。夜に入って快晴となり月も東の天に上り、涼風が僅かに来て水波を起こす。ちようど池の上を行くようである。午後九時、一行の日本人が一同に会してビールを傾けた。あまりに良い月なので、また甲板に上がる。十一時に床に就いた。気分は爽快。夕食のアイスクリームが大変美味しかった。

(●第十三日目)

四月四日 金曜日 快晴 寒暖計八十三度（摂氏二十八・三度）

午前六時起床。九時に東京（トンキン）を西方に望む。次いで安南（ベトナム）の諸山を望む。この辺の山には虎が多いという。暑気が強いといつても、涼風が絶えず来るため凌ぎやすい。これから先の印度洋は波が静かで、海が荒れることはないという。

香港から乗客が十数名増え、中には子供や婦女なども多い。皆平気に遊んでいる。今夜サイゴンに着くため、今この日誌を認めて船中の郵便に入れるつもりである。伏して祈る私である。

自愛なる両親、最愛なる妻子、並びに親族知己、益々健康でありますように。私の海上での様子は前々から記すとおりであります。ご心配なされませんように。北緯十六度。東経百十度。わが日本より二千八百余里を隔てた安南（ベトナム）近海の船中にて。

本多御両親様

並びに皆様へ

本多静六再拝

洋行日誌 第三報 柴棍(サイゴン)より新嘉坡(シンガポール)に至る
(●第十四日目)

四月五日 土曜日 曇晴

朝 七十六度(摂氏二十四・四度)
正午九十四度(摂氏三十四・四度)

午前四時、柴棍(サイゴン)に到着。ここは四時間ほど柴棍川を内地に遡った所というが、夜中なので良く分からない。目覚めたときには、船は棧橋に横付けになっていた。柴棍は北緯十度四十六分、東経百〇四度二十三分に位置し、人口は一万九千人ある。もともとこれは仏人だけの市で、支那街は四里隔てたチエーロンというところがあり、汽車によって通じている。柴棍は、日本の横浜から二千八百七十里、マルセーユまで七千二百七十五里のところである。

一行は午前八時半、馬車を使い柴棍を見物する。途中に見た民家は小さく、皆椰子の葉を屋根にしていた。家鴨を飼う家が多い。大きな鉄橋を渡ると市街である。市街は広く規則正しく配置されている。道の中央は車道で、両端の歩道との間には皆アカシアの木が植えられ境となっている。その樹木は鬱蒼として、ほとんど無数に連続している。緑の門の内側に行くようである。家屋は二三階建ての煉瓦づくりで、家の周りには多くの樹木が植えられている。緑葉が清風を送り、九十度以上の暑気もさほど辛くない。

ここで有名なのは、大守庁、裁判所、陸軍病院等で、カンベッタの肖像もある。高大な教会には数百の信者が集まっている。行ってこれを見ると、上座には欧州人がいて、次いで支那人、アフリカ人、印度人がおり、その服装の奇異なことは羅漢堂かと疑わさせる程で、羅漢を賛美するのには驚いた。

その途中にも頭部から赤または白の布をまとい、黒い顔だけを出して裸で熱い道の上を歩く様を見たが、これが羅漢でなければ不動明王である。

旅館はグランドホテル、ローヤルホテル、エビーホテル等が有名で、一日三弗という。市中にはコーヒー店(日本の氷店と同じように氷や茶を売る)が多い。また広大な植物園がある。香港よりも一層肥大しており、バ

ナナ、椰子等は実を結び、サボテンも二丈余りに達するものもある。土人は皆椰子の実の汁をすすっている。我々は西瓜かと疑ったほどである。植物園に沿って動物園がある。大蛇の周囲二尺に達するもの、巨大なサンシヨウ魚が大亀と遊ぶ様、四間もある鰐の泳ぐ様は身震いするほどである。

その他の虎や鳥は日本の動物園と大体同じだが、ただ全て大きいのである。ムジクイというコーヒー店で、氷とラムネを飲みながら昼食をとる。同店には一人の仏人の女の番頭がいて、他に支那人を使用し、大変広く綺麗であった。私たちの一行を見付けた支那人は、様々な陶器を売り付けにやっ

て来た。それからまた、待たせてあつた馬車に乗って十二時半に帰船した。馬車はなかなか綺麗で、馬は小さくとも四人を引いても十分であつた。

午後一時から私一人で近郊の農業の様子を見ようと、田舎の方へ徒歩で出掛けた。この辺は沼地でみな水田である。田の広さは二反歩位で、牛耕を用いている。今時しきりに耜の穀をむくのを見れば、その収穫料の多いことを伺い知ることができる。この地は南京米の産地で、一年に二回の収穫があるという。こうして他に溝渠の無いのを見ると、これがいわゆる天水場というものなのか。途中日光が現われ、炎熱に堪え難くなったので、四時に船に帰った。六時に大夕立があつたため、涼しさがよみがえつた。このため船を出て河辺を散歩した。

この日は言葉が少しも通じなかつたため閉口したが、今蛙の鳴くのを聞いてみると、日本の蛙と変わったところはない。ああ、蛙だけが日本語を話すのかと思えた。この辺は四季はなく、また樹葉の落ちることもない。実も落ちないので、花が咲き常に緑の状態という。この辺の水は濁流のためマラリア熱が多いという。さらに蚊がいて船を襲う。夜は涼風が来て、日中の苦熱を忘れさせてくれる。遥かに柴棍の街の明りが河に映るところは、(東京の)両国の納涼を思い起こさせてくれる。この夜一時に船は出港した。

(●第十五日目)

四月六日 日曜日 晴曇

朝 八十一度(摂氏二十七・二度)

昼 九十度(摂氏三十二・二度)

この日は終日涼しい風があったため、暑気は感じなかった。船は一杯の帆を張って正南に向かう。速きこと矢のごとし。

夜に入って月が現われた。満月のようである。数えるに(日本を発つて)早十五日になる。

たけ芝の浦わを出でて十あまり五夜の月を数へてぞ見る

相変わらず日本人八名、船の後部に集まり、夜の更けるまで納涼する。一行の心中はいかがなものか。次の詩はよく当たっているかどうか、しかし人の詩である。

月横大空千里白 風揺金波遠有声 夜寂兮望々々 船頭何堪今夜情
午後十二時に寝に就く。

(●第十六日目)

四月七日 月曜日 晴

朝 八十二度(摂氏二十七・七度)

午前六時起床。涼しい風があり、海面は穏やかである。明朝、新嘉坡(シンガポール)に着く予定なので、午後からこの日誌を認め、郵函に投じた。

話に聞く柴棍は、内地に深く入った所なので最も暑く、新嘉坡は緯度は赤道に近いけれど、柴棍よりも涼しいという。またこれから先は海面は池のように静かで気分も楽であるという。

柴棍からは乗客の数も百名を増したため、一層賑やかになった。私たちの食堂にも六十人程の人が入り、婦人や子供もいる。また仏国から柴棍に出稼ぎに来ている下級の者もいて、喧しいほど賑やかである。近日中に船中で芝居を始めるということである。

我々は大変急激な気候の変化にあっているのである。今日、この時間に至までの最高温度はどのようか。次の曲線は一目で分かるものである。後に航海する者は、この表を参考にして身支度をすれば大変便利であろう。

暑き汗を拭いつつ、物好きで作ってみた次第である。

一横浜よりシンガポールに至る航海中温度線一



洋行日誌 第四報 新嘉坡(シンガポール)

(●第十七日目)

四月八日 火曜日 晴雨屢変

寒暖計八十度(摂氏二十六・七度)

船は午前二時に新嘉坡(シンガポール)に到着した。午前八時、一行と共に上陸。馬車を命じて市内を見物する。馬車は大抵四人乗りで、便利で綺麗なところは日本の円太郎馬車と比べ物にならない。馬の体格は小さいが、強健である。このような馬車が棧橋の近辺に群がり客を待っているのだから大変便利である。

新嘉坡は人口十三万九千人。北緯一度十七分、東経百〇一度三十分位にし、わが横浜より三千五百〇七里ある。市内の有名な建物は、府庁、町会所、寺院、銀行等で、市内には蒸気鉄道、馬車、人力車がある。これらでの諸港でも大抵多少の人力車があり、皆日本の人力車によく似ていたが、やはり人力車だけは日本が一番である。

有名な植物園があり、ここには熱帯地方の植物のほとんどが備わっている。椰子、芭蕉類の植物が繁茂し、高大となっている。皆美しい花を咲かせ、大きい実を結ぶ。驚いたことは、いずれの植物も実も花も一年中絶え

ずあることで、椰子のように土人の常食するものは、下部に既に熟した大きい実（人の頭位）があつて、その上にはやや小さいもの、次には牡丹餅大か団子大のものがあり、上部には花が咲いている。暑い土地では人が働くことができなため、自然がそれだけ多く恵みを与えるということだろうか。池があり、水鳥を養っている。園の中央はやや高くなつており、ここからはその鬱蒼とした緑林を越えて海を望むことができる。

新嘉坡は馬來半島（マレー半島）の頂端にある一小島で、しかも緑の樹木と美しい花とでもって飾られた一大公園であると聞く。温帯以下の植物が多く備わっているは尤もである。私は既に植物界の全部を観察した筈である。しかし植物の種類は欧米に行くにしたがつて、甚だ珍しい種類を見ざるを得ないというが、同一の種類も国によつて大いに有様が異なる。殊にこれを利用する点、つまり経済上の関係においては、その差異が大きく考えたが、時間もなため僅かにその一端を見ただけで帰ることになつた。途中、日本の妓楼（遊女屋）があつた。香港でもこれを見掛けた。日本人の勇氣（何だか）に驚かざるを得ない。しかし正当な商店として、これらの諸港に店を張るものも幾つかはある。上海に二三軒あるだけである。しかし、これも支那店の店番という位で、書くのも忌ままし程である。帰途、歐羅巴ホテルで昼食をとる。氷が十分に行き渡るのには、柴棍（サイゴン）といい、当地といい賞賛すべきものである。しかも卓上に布板を吊して、常にこれを動かして風を送るため、暑さも感じさせない。市中には蠅が多く、また蚊も多い（柴棍も同様）。

四時に帰船する。当地は西にスマトラがあり、南にジャワ島がある。遠く海を隔てて東にボルネオがある。ここは航路中最南の地であり、ほとんど赤道下であるが、にわか雨が毎日数回降るため、暑さを凌ぐのに大変都合がよい。船は岸に横付けになるため、無数の船舶が停泊することができる。たいへん良い港である。五時に出港する。これから先はスマトラ海峡という所で、無数の小島が羅列し、樹木が鬱蒼として水に沈みそうで浮いているような、大変美しい光景が見られる。

（●第十八日目）

四月九日 水曜日 曇天 最高温度八十六度（摂氏三十・〇度）
午前六時起床。大雨がしばしば降る。涼風が来て暑さを感じさせない。

（●第十九日目）

四月十日 木曜日 曇天 最高温度八十三度（摂氏二十八・三度）
七時起床。左方にスマトラの小島を望む。椰子の木が多く茂つて絵のようである。

（●第二十日目）

四月十一日 金曜日 晴天 最高温度八十四度（摂氏二十八・八度）
昨夜来波が起こり、水が窓から室内へ飛び込んでくる。

（●第二十一日目）

四月十二日 土曜日 快晴 最高温度八十四度（摂氏二十八・八度）
六時半起床。海上の波が静まる。飛魚が群れをなして水面を飛んでいく。午後から手紙を認めて投函する。

（●第二十二日目）

四月十三日 日曜日 快晴 最高温度九十度（摂氏三十二・二度）
午前九時にコロンボに到着。当地はイギリス領で、いわゆるセーロン島である。人工石で築いた長い堤が、海中に突き出て大波を防ぎ停泊するのに便利である。横浜から五千〇七十七里である。

一人の案内人を雇い馬車で見物をする。港から数里行つた所に釈迦の寺があつた。ここは当時仏教の泰斗といわれる僧正のいるところで、経堂及び講堂（学校となる場）があり、さらに耶穌紀元前二千四百十九年に生まれた釈迦の像（臥しているもの）を安置している小堂がある。この小堂には種々の香がある。美しい花を供え、その前には三百六十五日昼夜灯し続けるという灯籠がある。種油を用いる日本の御灯明と同じである。